紹介

寺領莊園の研究

竹内理三著

「奈良朝時代に於ける寺院經濟の研究」「日本上代寺院經濟史の研究」の二大著を若くして物した著者は、今又そのたゆまざる努力の成果を、最近逝くなられた御慈母の御靈前に供へられたのが本書である。嘗て東大寺莊園の奈良時代に關する研究よりその研究を始めた著者は、次第に時代を下降して、本書に於ては、平安末より室町時代に至る、東大寺、東寺、醍醐寺の各寺領に及び、ほゞ寺領莊園の綜合的研究を中世一般に亙つて完成し、前二著と共に寺領莊園研究の好百科辭典として、長くこの方面の研究者に資する所があらう。いふまでもなく、東大寺、東寺、醍醐の各莊園文書はわが國莊園文書中屈指の好資料であるから。

氏の莊園研究の特色は上述の如く、各寺院毎に寺領全體として綜合的に把握せんとする所にある。例へば本書に於ても、最初に「寺院知行國の消長」と題する一篇を收めてゐる。かゝる綜合的研究は今後莊園研究の目指すべき道であるが、從來之に對し、各莊園の個別的研究が重んぜられたのは、猶當時の學界が急遽に綜合的考察をするには至つてゐなかつた爲である。爲に氏の研究とても綜合的立場に立つとはいへ、猶一々の內容に於ては、從來の個別的研究と同じものが部分的にとられ、東大寺、東寺と各寺領別に考察された事自身、綜合的方法と個別的方法の兩端を持してゐるものと云へやう。眞の綜合的研究は個別的研究の並列でなく、個々事象がすべて究極に於て、國家に統一されてゐる事に着目しその統一のされ方を考へる所にあるので、寺領莊園の研究も、わが國の國民生活の中に於て、寺領莊園がいかなる位置を占め、意義を有したかに研究の焦點が置かれねばならない。氏も長い研究生活を通じて、一歩一歩かゝる意味での綜合へと精進されつゝあつた。而して本書中附錄として收められた、「名發生の一考察」こそは最近の氏の到達點を示すものであり、氏の數多き論作中最もよき論稿であつた。寺領といふ綜合の見地にとらはれて、却つて眞の綜合が破られ勝であつた氏の方法が、この一篇によつて是正されてゐるからである。例へば、前記「寺院知行國の消長」の如きよき研究題目であるが、折角村田正志氏が一般的に知行國の考察を始め、國家全體の立場から之を綜合的に眺めんとされたに對し、著者は之を寺領に限つて考へんとし、その點に於て、綜合の面を自ら切り斷つて了つてゐた。綜合的、個別的といひ、表面的な題目のとり方にあるのではなく、諸々の現象を根柢に於て、國家につながるものとして把握するか、單にそれ限りの物として見るかといふ研究方法にある。故に寺院別に各寺院の寺領を統轄する方法を考察し、その國家全體に於けるあり方を考察する事は、正しい綜合的研究の立場であるが、個々別々の歩みを持つ莊民生

活を同じ寺領であるからといつて、之を寺領別に綜合しやうとしても無理である。綜合すべき性質の對象と、綜合すべからざる性質のものがある事を明らかにして、正しき綜合が行はれねばならない。「名邊生の一考察」は正にこのよき綜合に立つ研究である。氏に於て更に望む所は、今後從來の如き、包括的な精力的な史料蒐集に加へて、各事象の更に深い洞察檢討を以て、内容的綜合に向つて進まれん事あるのみである。我が身を顧ざる妄評、幸ひに著者の御寛恕をお願ひする。（畝傍書房發行。昭和十七年一月刊、A六版五五五頁。定價六圓。畝傍史學叢書）（清水三男）

「中世日支通交貿易史の研究」

小葉田　淳著

中世日本經濟史の研究に於て、特に重要なる意義を擔つてゐる日支貿易の問題は、早くから、學界の關心事となつてをり、既に多くの論著が公けにせられてゐるが、その大部分は、政治史的觀點から大勢を概觀してゐるものが多く、純粹に經濟史的な觀點から、貿易そのものを直接に研究對象としたものは、寥々たる實狀に在る。それと云ふのは、貿易として考察するとすれば史料採訪の範圍が國内のみでは不充分であつて、支那・朝鮮・琉球等に亙ることが必要であり、その量も莫大なところから、その全部に通曉することが容易でないのに依るのであらうが、その困難も、最近學者の眞摯なる努力に依つて、次第に克服されつゝある。かゝる際に、昭和三年に本學を卒業せられてから、孜々として、日本中世經濟史の研究に專念しておられる臺北帝國大學助教授の小葉田淳氏が「中世日支通交貿易史の研究」の大著を公けにし、日支兩國の史料を自由に驅使して、兩國の中世貿易に關し該博なる蘊蓄を傾けて、微細なる點まで、貿易の實勢を明らかにせられたのは學界のために、慶賀の念に堪えない。

本書の構成は、最初に日明交渉の開始と、明の對外政策を明らかにし、次いで遣明船の往來を時代を追つて說き、更に遣明船の經營及び組織として、船舶・乘組員・貨物・經營と收得・商人の參加の問題を究明し、その次には、明の市舶司・勘合・條約其他の制度を概觀し、次には、商品の移動を主題として貿易の趨勢を觀察し、最後に日明交渉の新展開として、明の一方的な立場よりする官貿易の中絶その反對現象として貿易の盛大とを取り上げて結論としてゐる。その所論の多くは、氏が先に神戸市の委囑に應じて、神戸市史第二輯の別錄として、著はされた「中世の兵庫と外國關係」及び臺北帝國大學文學部史學科研究年報に發表せられた「足利後期の遣明船通交貿易の研究」に見ゆるところであつて論證精緻、殊に遣明船の經營法、明の日明貿易に對する制度處置等の對策を論ぜられた處などは、その工書が公刊の當時、既に學界の賞讃を博したところである。然るに、この書は共に特殊出版であつて、研究者でも容易に入手し難い憾みがあつたが、今回本書が印刷せられ、何人でも、これを讀み得るやうになつたのは、今後の日明貿易の研究に、大いなる利便を與へることであらう。